

雑 録

勝 手 櫻

小 泉 源 一

大和吉野の勝手神社の境内に勝手櫻 (*Prunus sacra* MIYOSHI in Tok. Bot. Mag. XXXIV. 1920. p. 168. fig. 4) 唯一株のみあり、此櫻の來歴は明にして吉野の大工職林兵太郎が吉野の竹林院の奥庭のヒガンザクラ(天人櫻)の老木の附近にありし櫻の幼苗一本を此勝手神社の境内に植ゑしが即ち此勝手櫻なり、林兵太郎は後吉野を去り五六年前に六十七、八歳にて死去せり。

勝手櫻の花は優美にして吉野にては中晩咲の方なり、花は中大にてほんのりとさくら色を呈し、萼亦中大にして萼筒は毛少きも往々ヒガンザクラのもの、如く壺状を呈す、萼片亦外面に少毛あり、花梗は中大にして密毛あり共同花梗なく花時苞鱗は残留す、花柱は有毛なり、花時葉をあらはさず。

葉は頗る山櫻の葉に似たるも葉柄は幼時一般に毛多く葉身下面脈腋に毛あるのみならず下面脈上にも毛を生ずるあり、成葉となれば毛は主として葉柄にのみ少しく残れり。

果實は毎年未熟中に全部落下して一も止めず、此櫻は前記の如く竹林院の庭に自然に生ぜし一の特種櫻なるが決して果實成熟せず、一般の特徴はヒガンザクラとヤマザクラの性質を兼有す、兩者の間品ならんか。

侏 羅 紀 被 子 植 物

小 泉 源 一

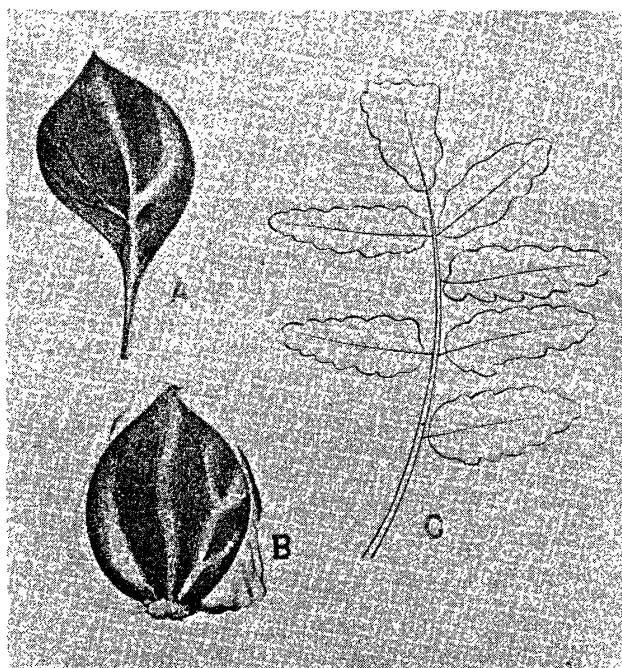
化石の上より知らるゝ、地球上最古の被子植物は侏羅紀被子植物化石にして、其數發見されしもの驚くべく少し、此數少き内にも疑はしきもの却て多く、稍たしかなるものは大さう少い。

疑はしきものゝ内には、SAPORTA 氏 LIGNIER 氏等が佛蘭西の侏羅紀下部及び上部より報告せし、*Yuccites*, *Caulomorpha*, *Goniolina*, *Changarniera*, *Palaeospadix*, *Propalmophyllum* あり、HALLE 氏が英國中部侏羅より報告せし *Cloughtonia* あり、東洋にては T-KETOVA 氏が天山の侏羅より *Problematospermum* や本邦の中部侏羅なる手取統よりも横山先生により *Valisnerites* が報告されてある。

木片の化石が解剖上より被子植物體の化石と決定されしものには印度の下部侏羅より SAHNI 氏の報告せる木蘭科近似の植物や、獨逸の中部侏羅より KRÄUSEL 氏の報告せし *Suevioxylon* がある。

又葉の化石としては英國の中部侏羅より SEWARD 氏の報告せる *Phyllites* 2 sp. (Fig. 1. A. B.) や、獨逸 Solnhofen 上部侏羅より SALFELD 氏の報告せる *Ungelia* (Fig. 1. C.) がある。

Fig. 1

A. B. *Phyllites* sp. C. *Ungelia*.

以上の化石は唯侏羅紀にも相當高等の被子植物のあるを知らしむるのみにて別に被子植物の系統上の問題等には何等の材料を供給するものでない。

然るに此に H. THOMAS 氏が英國の中部侏羅より發見せし一種の原始的なる被子植物の一群に *Caytoniales* なるものがある。

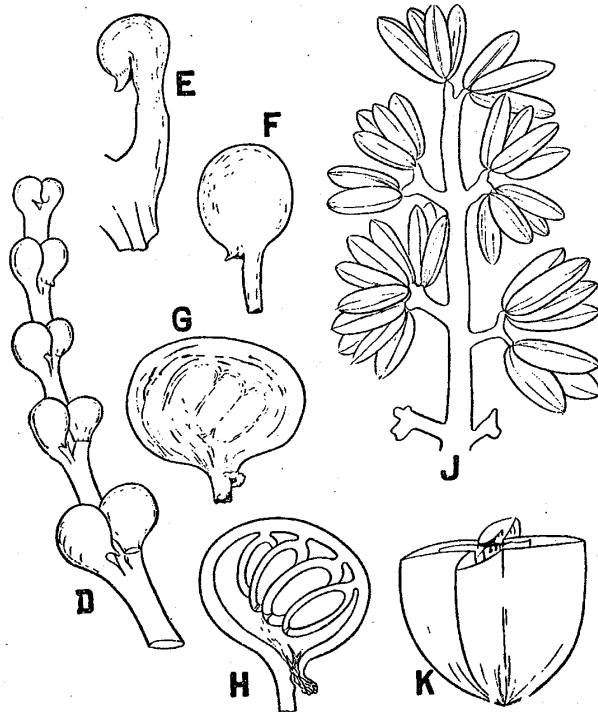
Caytoniales とは THOMAS 氏が *Protangiosperm* と見做す所の一群の植物で、大孢子葉の化石二種 *Caytonia* 及び *Grithoropia* の二屬及び小孢子葉の化石一種で *Antholithus* なる一屬で、*Antholithus* は他二屬の内の一と

同一種なる植物と考へらる、然し從來までは兩者同一體より出でし化石を發見せざるにより假に別屬として取扱ふものである、而て之等の葉としては從來三疊紀最上部の Rhaetic より白堊紀に亙り地球上に廣い分布をしてゐる *Sagenopteris* と稱するものが夫れと思はざるを得ないと云ふ、其理由は以上の三屬のある處必此 *Sagenopteris* を伴ひ未かつて兩者別々に現れしことはないからである。

此類は兩種共に果實も發見さるゝが之亦必 *Sagenopteris* と共に見出さるゝのみである。

Antholithus が又彼と同一種の雄蕊であると思はざるを得ざるは必共存して發見さるゝは勿論、其翅ある特色の花粉は前雌蕊の柱頭上に接着して發見さるゝからである。それから又雄蕊、雌蕊及び葉柄の表皮細胞 (Epidermal Cells) の Cuticles は全

Fig. 2



Caytoniales:

- D. E. F. *Gristhorpia*
- G. H. *Caytonia*
- I. K. *Antholithus*

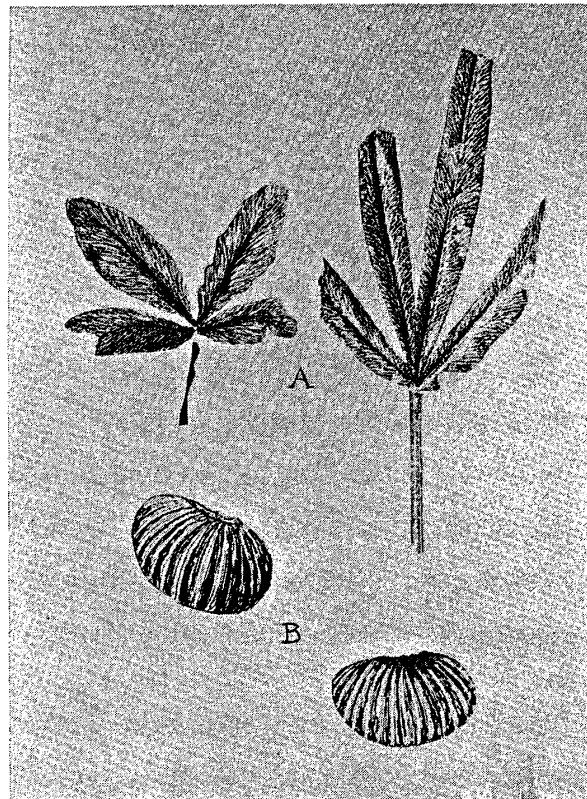
雄蕊 (*Antholithus* 属) (Fig. 2. i.) は羽状にして各羽枝は双叉分岐をなし各分岐の先端に数ヶの葯を附着す。葯 (Fig. 2. k.) は四室で内に翅ある花粉を藏す。

雌蕊 (*Gristhorpia* 属) (Fig. 2. d.) は亦羽状にして各羽枝は軸の眞の側方より生ずるに非ずして少しく軸の前上方より出でる、羽枝は極て短く大部分は子房 (Fig. 2. e. f. g. h.) で柱頭は底部にある、此雌蕊は一見蘇鐵の雌蕊と同一構造をなすものゝ如くである。而此子

く同一であることも亦此三者同一個體の部分であると思はしめる。

葉 (*Sagenopteris* 属) (Fig. 3.) は複葉で葉柄の頂端に二對の小葉を生じ、各對は大きう相接近したり又餘程離れたりしてゐる時には三小葉掌状に着いてゐるのもあり稀には只圓形の一小葉のみのももある。葉脈は網狀脈で、Cuticle は中性被子植物の夫れに近似し、氣孔亦全く被子植物型である。

Fig. 3, *Sagenopteris*.



B, *Sagenopteris* の fruit-Carpel とするもの

房には縫合線 (Suture) と云ふものがなく表皮細胞全面到る處同一であるのを見ると羽狀心皮の羽片が内曲し縁が合して出来た子房ではない、それで此雌蕊は一の葉ではなくて一の小枝で其各小羽枝の維管束上に數ヶの胚珠即ち大芽胞囊が形成されたのを小羽枝が胚珠の下から共同の殼斗狀體を形成しつゝ遂に之を以て胚珠を被ふてしまつたのが子房である。

然し之は裸子植物でない事は如何に若い子房を見ても既に其體を成し決して裸子の状態を見出さず成熟しては立派な柱頭があつて此に花粉がついてるので分る。

如此にして生ぜし果實は從來 *Sagenopteris undulata* NATH. や *S. canadensis* BERRY の sporocarp と認めらるゝものと酷似せるも亦注意すべし。

從來孢子囊は葉につくものとして植物形態學を成してあつたが、最原始的なる古松葉類 (*Psilophytales*) は其植物體は唯莖軸と枝とのみありて根も葉もない、根や葉が分化さるゝ以前に既に孢子囊は小枝の末端が變化して以て形成されてゐる、故に孢子囊は葉にできるものでない。

葉と云ふものは軸や枝の表面より生ぜし突起が變じて小型葉となり中型葉や大形葉は皆枝の細く分枝せし間に共通の附屬扁平體を生じたので出来たもので之等の葉に生じたやうに見ゆる孢子囊は實は葉の根底となつた各小枝から出来たのであると云ふのである。

それで *Caytoniales* の雌雄蕊も實は小枝の變形物で子房は小枝より突隆せし殼斗狀體の愈合より生ぜしもので、此殼斗狀體の愈合するに到らずして眞の殼斗となり居るものは *Pteridospermae* 中の *Umkomasia* などの類に之を見ると云ふ。

それで *Caytoniales* の如きは眞の *Protangiospermae* で即ち *Pteridospermae* より出でしものならん、而今 *Helleborus*, *Aquilegia*, *Delphinium*, *Aconitum*, *Prunus*, *Galega*, *Caltha* 等の萌を開いて見ると主なる維管束は三本づゝありて三の小枝が愈合して一の子房を形成したものであると思はるゝが、丁度之は *Caytoniales* の左右二個の子房と中央の主軸の一部とを愈合すると如此子房となると云ふ。

Sagenopteris が果して被子植物であつたならば被子植物の化石の存在は石炭紀以來と云ふことになる。

H. v. IHERING 氏植物地理根本概念

小 泉 源 一

南米及亞弗利加の動物發展地理學に造詣深き H. v. IHERING 博士は一九三〇年二月二十四日逝去せり。氏は Archihelenis 及び Archinotis 兩古大陸に於ける地史的